

活動報告 博物館教室〈楽しいしぼり染め〉(3)

中級―「藍の絞り染めで浴衣を作る」

宮本 康男*

はじめに

当館では平成5年以来工芸部門が担当して絞り染めにかかわる教室を実施してきたが、ここでは平成12年度に実施した博物館教室〈楽しいしぼり染め〉―中級の活動と成果をを中心に報告する。

宮本がまとめて報告する形をとるが、これらの成果はこのワークショップにかかわった全ての人々の努力によるものである。

1 これまでの経緯

博物館教室〈楽しいしぼり染め〉についての経緯は秋田県立博物館研究報告第23号、24号、25号にその詳細を報告しているので、改めて詳しく述べることはしないが、その趣旨等については若干触れておきたい。

この教室は秋田県内で行われた伝統的絞り染めの文化と技術の掘り起こしと伝承の一助となることを目指して開設されていて、入門講座の初級と、経験者を対象とした中級、それに藍の生葉染め講座を併せた構成で行ってきた。

ワークショップとして中心になっているのは中級の活動である。博物館での活動は別枠での講習を含めて延べ20日程度であるが、自宅での製作にはその幾層倍の日時が費やされている。

活動内容は、このワークショップの目指すところにより、県内で行われた鹿角や横手、浅舞の古い絞りの仕事の写しが中心になっている。その中から絞りの技術をひとつひとつ学んでいくとともに、私たちの風土の特性と言うか、何かその匂いのようなものを嗅ぎ取って行こうとしている。しかし、全く創作をしないというのではなく、最終的には秋田の伝統絞りの精神を受け継ぎ、現代の秋田の絞りとして再生する事を願っており、様々な創作的なチャレンジもしている。

2 12年度の活動から

伝統的な絞りの意匠は、狭い幅の布を縫い合わせて作る和服の特性に合わせて考えられており、伝統的な絞り染めの意匠の構成理念や技術を考えていく上では、やはり、和服を仕立てることを目的として1反の布を染めてみる必要がある。そう考えて、浴衣1反分の布地を絞って染めることを始めて3年になった。

今年度は、昨年度にまして多様な絞りへの取り組みが見られたが、中でもこれまで取り組む人が少なかった三浦絞りに取り組む人が増えたことが注目される。紺絞りを手がけるからには、一度はやってみたいのが三浦絞り、それも総三浦絞りである。その手間を考えると取り組むのにかなりの覚悟が必要な仕事であるにもかかわらず、取り組む人が増えているのは心強いことである。浅舞の込み入った絞りの写しの仕事もこれまで以上に手がけられている。鹿角の絞りについては、今年度から松皮菱の意匠を加えた。横手風の絞りにも本格的に取り組む人が出てきた。たたみ絞りについては、ここ数年の試行錯誤を通して、ようやく形になってきたところである。板締めは伝統的な技法ではないが、たたみ絞りの仕事の延長上にでてきた仕事であるので併せて紹介しておく。

3 12年度作品と技術から

◆三浦絞りについて

三浦絞りの技法は浅舞で「なるみ」と呼ばれていた。これは、三浦絞りが木綿の絞り染め産地として有名な愛知県の有松、鳴海で盛んに行われた技法であることに由来するといわれている。絹絞りでは面を絞りつぶすとき、鹿子絞りをを用いることが多いが、木綿絞りでは面を三浦絞りで絞りつぶすことが多い。三浦絞りは近世

*秋田県立博物館

の浮世絵版画等にも浴衣姿として多く登場し、人気の高い絞りであったことが推測される。

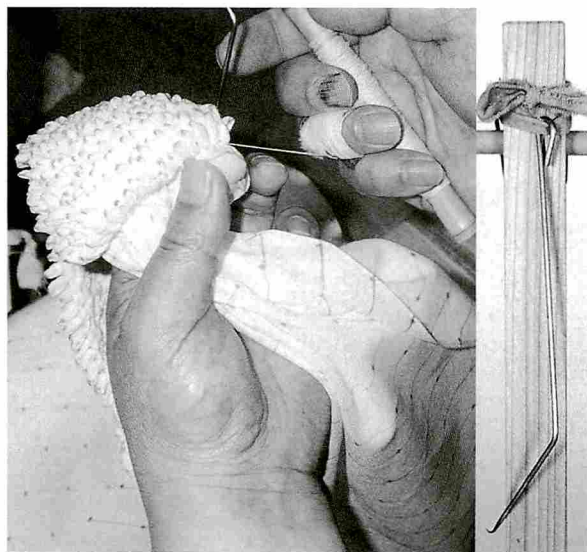
古い三浦絞りを見ると、絞った粒が真っ白に抜けないで、染料が絞りの中までしみこんで、薄青く仕上がっているものが多い。これには括り糸をあまり強く締めないで染料を強く浸透させたものと、一度三浦絞りを解いてから浅黄を染めたものがあるとみられる。

「なるみは強く絞ればよいというものではなく、ギュッと締めてから、フッと一息ゆるめるのがこつ」と教えられたと言う話がある浅舞出身者から聞いた。

1) 三浦を絞る

三浦絞りは写真のような鉤針を用いて絞る。

鹿ノ子絞りでは粒の根元に何回かくくり糸を巻き、糸を被せて止めてゆるまないようにしてから隣の粒を絞るが、「なるみ」では粒の根元に括り糸を1回巻いて引き締めるだけで止めないで隣の粒を絞る。



布を指で突き上げた粒に糸を一巻きするだけで、結んで止めずに粒の頂点に針を掛けて糸を引き締めた状態で次の粒を指で突き上げて糸を巻きつける。次の粒、次の粒と一巻きだけ糸を巻きつけて次々と絞っていく。絞りは右から左へと進める。左端まで絞ったら糸は止めずに、今絞った粒の列の後ろを回して列の始めの粒の外側に回し、かぎ針をこの粒に掛けて糸を軽く引いて緊張させて保持し、次の列の先頭の粒を指で突き上げて括り糸を掛け絞り始める。糸は

粒の列と列の間を通過して右端に戻り、絞りは右から左、右から左とすすめ、逆方向に絞ることはしない。くくり糸は一巻きしかしておらず、結んで止めていないため、あまりゆるく絞ると作業中に糸が解けてしまう。解けるのを恐れて、きつく絞ったり、余分に糸を巻いたり、糸を結んだりすると、その部分の染め上がりが他より白くなってしまう。

これまで述べたように、三浦絞りではくくり糸を止めないのが本当であるが、初心者の場合、最初の内は粒の列の始めと終わりにかぶせ止めをして絞る。30cm程も絞り進むと、絞った部分が外に反るようになり、初心者でも端がかぶせ止めをしなくて絞っていけるようになる。染め上がった布の始めの方で両耳が白っぽくなるが、実用上はさほど問題はない。

三浦絞りには、布地に対して直交する方向に(真横に)そろえて絞った「横三浦」、斜交する方向にそろえて絞る「斜め三浦」、粒の大きさを揃えず任意に大小取り混ぜて絞る「やたら三浦」等がある。また、布地全体を絞りつぶす総三浦の他に、モチーフの意匠の間を埋める地模様として三浦絞りをを用いることも多い。

2) 三浦絞りの染め

三浦絞りのむきみ模様が立体的にきれいに出るかどうかは染め作業の如何による。どんなに上手に絞っても、いきなり強い藍に入れて染めると、ゆがんだ白い輪が並んでいるだけの染めになる。

染めに先立って布は水に浸漬しておく。最初の染めでは、浸漬した水をよく切って少し乾かし、少し水分があるかなと言う状態で、弱い藍で染める。これによって絞りの奥まで浅黄色が入る。浅黄が充分発色したら、次からは強い藍(濃色)を染めていく。2回目からの染めは水分を強く切らない状態で染める。先行している水分のため強い藍は中まで浸透できずに、外側の液に触れている部分のみを濃色に染める。濃色の染めを繰り返して希望の濃さにまで染める。

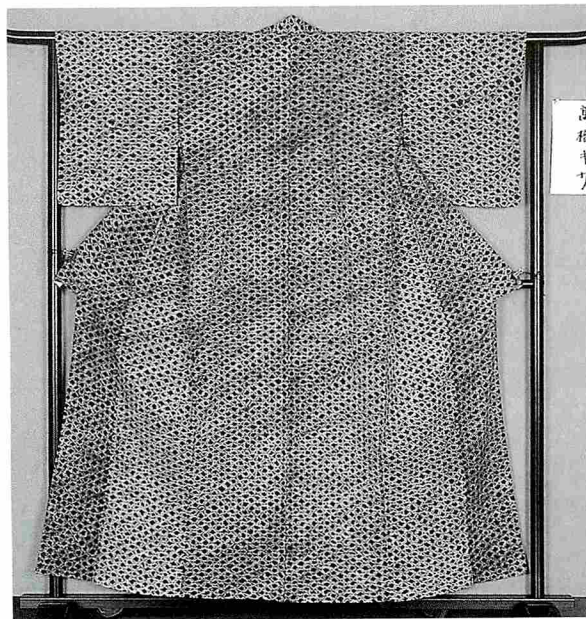
このような染め方によって、むき身模様はグラデーションの効いた立体的な文様として染められる。

一回目の染めの前の水切りは脱水機で行っている。発色は、細かく絞られているのでなかなか中の方まで進まない。タオルなどで余分の水気を取り発色を早める。2回目以降の染めは、このタオルで水気を取った程度の水分で行う。藍の染液はハイドロ建てすると往々にして還元が強くなりすぎるので、染め重ねを長時間やると布についた藍まで還元されて、染め重ねた割には濃くならない。染め重ねは浸漬時間でなく、布の藍の色の戻りをみながら行うことが必用である。

〈総三浦の作例〉



横三浦絞浴衣 平川悦子/秋田市



斜め三浦絞浴衣 高橋キサ/千畑町

〈三浦絞をアレンジした作例〉



三浦絞着物 中野竹子/秋田市

〈三浦を地模様を用いた作例〉



三浦地草花文様浴衣 川村悦子/山本町

この作例は浅舞絞りの意匠の写しである。花の文様の花卉の輪郭を折り縫い絞り、花卉の中の筋を鹿子絞り、花の芯を小帽子絞りにし、地を三浦絞りにしてある。折り縫い絞りの糸を先に引き締めると、三浦が絞りにくくなるので、折り縫い絞りは糸入れだけにしておいて、三浦を絞った後、最後に引き締める。染め方は三浦絞りの染め方に準じて行うが、花の部分には出来るだけむらを出したくないので、良く広げて均等に発色させる。

この作品の染めでは、藍の色に厚みを出すために、藍を染め上げた後、黄檗の染めを重ねている。黄檗を染める前に鹿子の括りを解いているので、鹿子が淡黄色に現れている。

◆絞り技術を高度に複合した絞りについて

高度な絞り技術の複合は、浅舞の上絞りに見られる。この浅舞の上絞りに見られるような意匠を絞って染めることができるようになるのが我々の目指すところのひとつである。



流水に紅葉文浴衣地
鈴木比佐子／協和町



笠に雨散り桜文様浴衣地
飯塚芳子／湯沢市

二つとも浅舞絞りの意匠の写しである。

流水に紅葉文は、白絞りの流水の線を折り縫いし、糸を引き締めたものがちょうど廻るくらいの芯棒を準備し、縫い始めの糸と縫い終わりの糸をきつく結んで縛りつける。芯棒は、木の棒に捨て布を巻いたものか、綿布を固く巻いたものを用いる。この意匠ではひとつの流水のモチーフにつき4つ縛ることになる。折り縫いの線が芯棒を一廻りする畝が4本できるので、畝の間3ヶ所にそれぞれ、布やビニールのテープを硬く巻き付け、更に糸で巻き締めて結ぶ。七宝つなぎは鹿ノ子を括る。小さな紅葉は縫い締め巻き上げ、大きな紅葉は輪郭を折り縫いにし、中を三浦絞りにする。紅葉の周りの流水は大小の鹿ノ子で表現する。順序としては①縫い締め巻き上げの輪郭に平縫いで糸入れをする。②折り縫いの部分の糸入れをする。③鹿ノ子を括る。④三浦絞りをする。⑤小さい紅

葉の輪郭の糸を引き締め巻き上げ絞りにする。⑥大きな紅葉の輪郭の折り縫いを引き締めて止める。⑦白絞りの流水文の所を前述のように絞る。⑧絞ったものを水に漬ける。⑨水を切って弱い藍で染める。⑩紅葉と周りの流水の部分を軽くからげて縛る。⑪強い藍を希望の濃さになるまで染め重ねる。⑫発色→水洗→乾燥→糸解き→洗剤洗い→乾燥→巾出し・仕上げのような段取りで染める。

⑩で処理した部分の染め色が少し明るめの藍になり、白絞りの白と、その他の濃藍の部分と併せて対比の美しさをねらっている。

笠に雨散り桜の方の絞り方は既に当館研究報告第25号で川村悦子が詳しく報告している。



鯉文様絞染浴衣 石井千恵子／秋田市

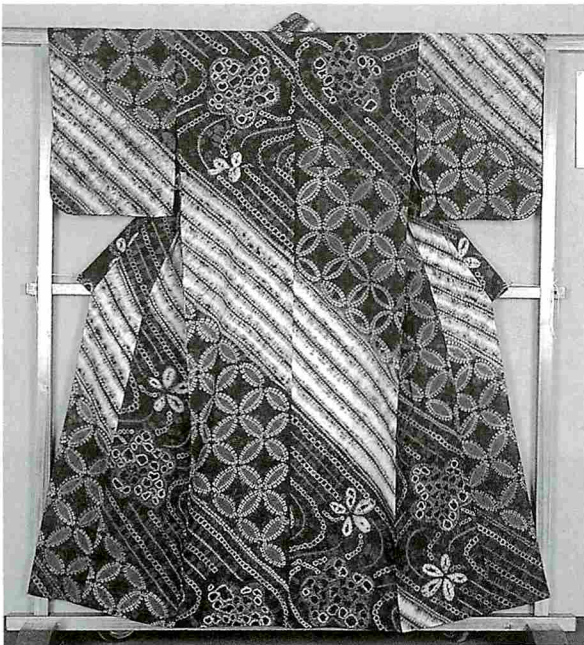
鯉文様の意匠も浅舞絞りの意匠の写しである。技術的には流水に紅葉文の絞りとはほぼ同じである。白陰絞りの七宝つなぎを斜めに入れて変化を出している。七宝つなぎは合わせ縫い引き締め絞りにしてから、絞った部分が平面にそろうようにしつけ縫いをして固くくまとめる。白陰絞りの文様の配置が、布の耳から耳へ通っていれば、流水紅葉文の絞りの時と同様に丸い芯棒に巻きつけて丈夫な糸で白陰にする部分の縁を芯棒ごと巻き締める。芯棒は、巻き付けたとき白陰の部分の耳と耳がくっつく程度のもを準備する。白陰絞りにする部分が布の両耳に届いていないデザインの場合は、芯棒を用いないで、絞って固くまとめた部分より

少し大きめの木の板に捨て布を巻いたものを用いる。絞った部分を板の上へ上げて、周りに細釘を打って止める。このとき生地に直接釘を打つのではなく、晒布を細く裂き固く撚った細紐を準備し、この紐を白陰の部分の周縁に廻してその上から細釘を打つ。

全体の作業の工程はおよそ以下の通りである。

①巻き上げ絞りの輪郭の平縫い、モチーフの輪郭の折り縫い、白陰の七宝つなぎの合わせ縫い等縫い絞りの糸入れをする。②鹿ノ子を括る。③巻き上げ絞りを絞る。④三浦を絞る。⑤折り縫い、合わせ縫いを引き締めて止める。⑥白陰を芯や台に止めつける。⑦染める。

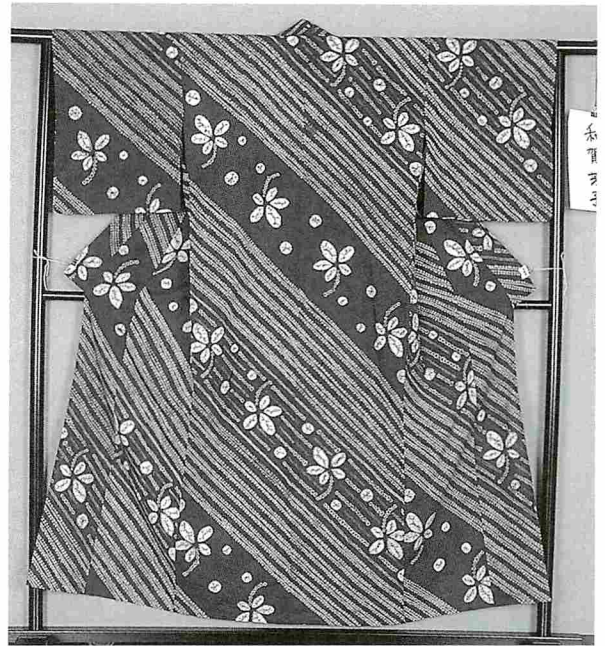
この流水紅葉文と鯉文様の染めでは、染め色の濃淡を染め分けているが、本来は絞りの布の寄り具合で自然に濃淡が出ると見ている。このあたりの絞りと染めの手順の解明は今後の課題である。



流水に紅葉文様絞染浴衣 武田芳子/秋田市

この作例は前掲の流水紅葉文の意匠を単純化して現代風にアレンジしたものである。白絞りの流水の部分の直線化され、絞りやすくなっているが、白と藍の濃淡の対比の華やかさは生かされている。

文様の斜め切り替えを更に単純化し、デザインを更に象徴化していったものが次に掲げる作例である。白絞りを用いずに、合わせ縫い絞りを並べて、藍の中に白が優勢な面を作り出している。



流水に紅葉文様絞染浴衣 和賀芳子/秋田市

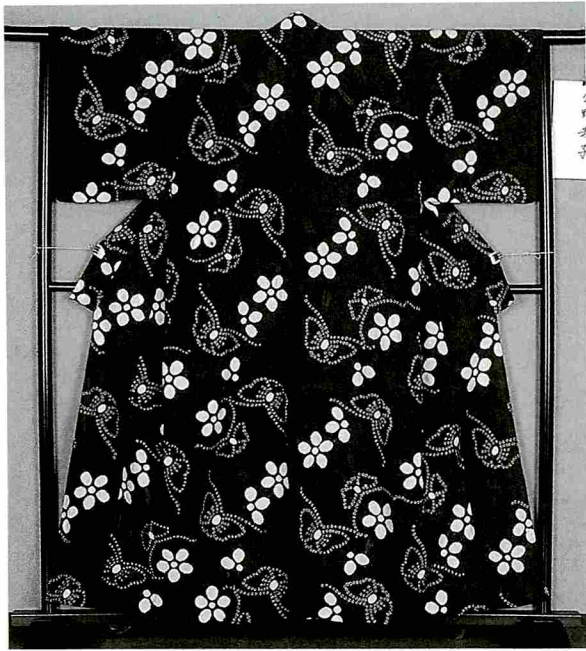
◆横手風の絞りについて

鹿ノ子と小帽子絞りによる絞りの意匠

横手絞りの特徴は花や蝶、流水文様などによる主題を繰り返した意匠である。布全体として上下ができないようにモチーフの向きを変えながらレイアウトされている。花や蝶の花弁、羽等の単純な形を小帽子絞りで表現し、茎、枝、流水等の形を鹿子絞りを連ねて表現する。鹿子には突き出し鹿子と、機械鹿子の双方が見られる。小帽子は輪郭を縫い締め、縫い締め線の内側を根締めしてから防染のための布、紙、ビニールなどを巻き付け、それを巻き上げる。

突き出し鹿子は布を突き上げない程度に尖らせた串を立て、布をかぶせて尖った布の先端に糸を巻き引き締めながら串から抜きあげ、そのまま何回か糸を巻いて止め小さな根巻き絞りを作る。機械鹿子は横位置に固定した小さな鉤針に、絞る鹿子の中心を掛けて軽く引いて尖らせた布の先端に糸を巻いて引き締め止める。絞りができたら鉤針からははずす。

突き出し鹿子は、丸みのある柔らかな鹿子模様になる。機械鹿子はやや四角い感じの鹿子になるが、布を強く引きすぎると鹿子が長くなる傾向がある。鹿子を絞る能率は断然機械鹿子の方がよい。何れもくくりが簡単に解けないように絞るためには少々練習が必要である。



蝶花文様絞染浴衣 今野寿子/山本町

この絞り染めの工程は以下のようなものである。

- 1) 絞りのデザインを布地に青花や代用青花で下描きする。
- 2) 小帽子絞りの輪郭を糸入れする（粗い針目で平縫いする）。糸止めができる程度に糸を残して切っておく。
- 3) 鹿ノ子絞りをする。

小帽子絞りの輪郭の糸を締め、縫い糸の上を2～3回糸で巻き締めて止める。

- 4) 帽子絞りをする。布やビニールをかぶせて糸で巻き上げて絞る。端っこの部分は色が入らないように特にしっかり巻き締める。

古い絞りの製品を見ると、鹿ノ子絞りと小帽子絞りが逆の側から絞られているのがわかるものがある。浅舞で書かれた『雪国小記』の中の「染織百話一八十翁談」の絞染の項にも「白く抜く部分は油紙で固く包んだ。例えば花模様の花弁のごときはその地白を後に引き、くくす線とは反対にして締めた。」と記されている。

横手やその周辺で盛んに絞りが生産された時代（江戸末～明治）には油紙等の素材が帽子絞りの防染に用いられていたが、防染力が十分でないので、より良く白を抜くために裏側から帽子絞りを施したものとみられる。また、実際に絞ってみると、裏から帽子絞りをする方が、先に絞った鹿ノ子絞りを崩す恐れが少なく、絞りやすい。また、蝶の胴や花の芯等、真ん中に来る帽子絞りの部分

は周りの帽子絞りの部分とは反対の側から絞った方が入り組まなくて絞りやすい。

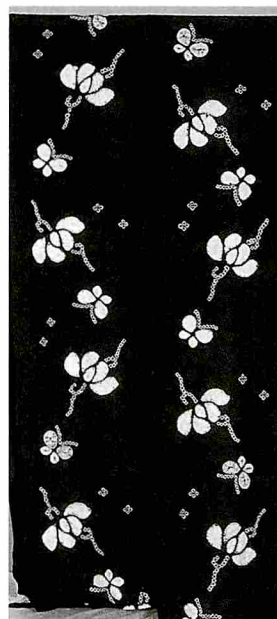
巻き上げ絞りは裏から絞ったものと表からしぼったものは違って見えるが、帽子絞りは裏から絞っても表から絞っても白抜きなので変わりはない。5) 藍で染める。

この絞りでは濃紺の地に斑を作らないように染める。しかし、絞った布のような、くしゃくしゃになった布を普通に染めれば必ず染め斑ができる。

斑無く染めるためには、染める布の水分をできるだけ少なくして染める。また、染液の中で布を良く広げながら手早く繰って染める。あまり長時間染液の中に置かない。長時間藍の染液の中に置くと液に接している面は濃くなるが、裏になった内側は一定以上濃くならない。発色にあたっては、部分による発色の遅速が少なくなるように、染めた布を手早く広げてばたばたさせ風を入れたり、叩いて染液を布の中で移動させたりする。また、いきなり濃く染めないで、少しずつ濃くしながら充分濃色になるまで染めた方がよい。

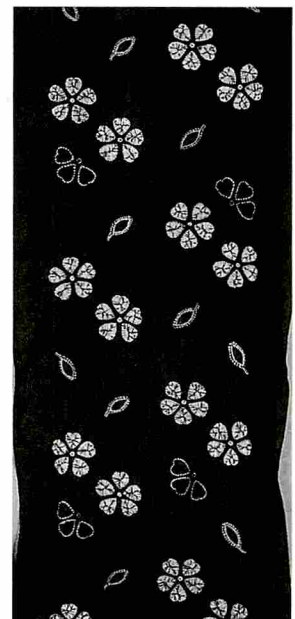
布の水分をできるだけ少なくして染めるが、あまり少ないと、帽子絞りの中に藍が入ってしまう。本当はどのようにして染めたのか、手がかりが無くてもよく分からないが、この教室では、水に浸した布を脱水機で軽く脱水してから染める。

染め重ねは充分に発色させた後再び軽く脱水をかけてから行う。



蝶に辛夷文様浴衣地

田口公子/秋田市



桜花文様浴衣地

広瀬昭子/天王町

◆柳絞について

簡単そうに見えて奥が深い柳絞り—浅舞

柳絞りは布の縦方向全体に柳の葉を思わせるような模様が染め出される絞りである。

布地を縦にしごいてひも状にして、くくり糸で荒く巻き締めて染めるとできる模様である。しかし、まんべんなくきれいに柳葉模様を出すためには、それなりの配慮が必要である。絞りと染めの概略は次のようなものである。

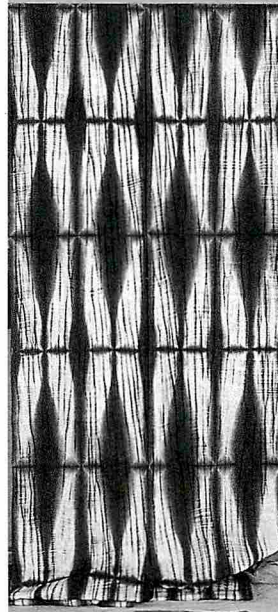
1) 柳文様を絞る

布は端を絞り台や柱・机の脚などに固定して絞り始める。偶然に任せずに不規則に細かい襷を取り、布の表面が裏面に巻き込まれないように配慮しながら丸めて糸を強くしっかり巻いて絞り、ロープ状にしていく。巻き締める糸は5mm～1cm程度の間隔で粗く巻き、あまり細かく密に巻かないことが肝要である。ふた掴み位の長さ毎に新たに襷を取りなおして絞っていくと、それらしい感じになる。襷を取りなおす時、糸巻きは足指等に挟んで糸がゆるまないように保持する。休憩するときは絞っているところを紐で固く縛って緩まないようにしておく。長くなって糸を巻きにくくなってきたら、固定した位置をずらして、絞っている近くをしっかりと固定して、絞り続ける。しっかりと固定しないと硬く絞ることができない。くくり糸は二掴み程度の長さの棒を糸巻きにして巻き取っておき、棒を持って糸をまいていくときつく糸を掛けることができる。手で糸を引き締めず、棒を引いて糸を引き締めるようにする。手で糸を引き締めると手を切ることがあるからである。特に風呂上がりや、炊事・洗濯などの水仕事の後は皮膚が柔らかくなっているので手を切りやすい。手の傷はそのうち治るが、白布に血を付けてしまうと後始末が大変である。

2) 藍で染める。

柳絞の藍染めは、染め方によりかなり表情が変わる。染める前に水に漬けたものをどの程度水を切って染めるかにより、仕上がりが白が勝ったものにも、藍が勝ったものにもなる。脱水機で水を強く切って染めると藍が強くなる。水を切らずに染めると、白地にわずかに青い柳葉文様が入る程度になる。また、淡色、濃色を併せて立体的に染

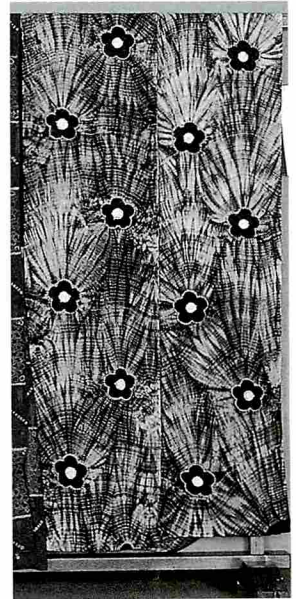
色することもできる。そのためには、まず乾いた状態で弱い藍に入れて染め、充分発色させた後水分を布に残した状態で強い藍で染める。そうすると、周りが浅黄、芯が藍の柳文様が染め上がる。



板締め・柳絞浴衣地
宮腰宏子／能代市

左掲の作例はたたんで板締めをして染めた布に、更に柳絞りを施して染めたものである。

右掲の作例は梅花文様を絞った地を柳絞にしたものである。
(柳絞のアレンジ)



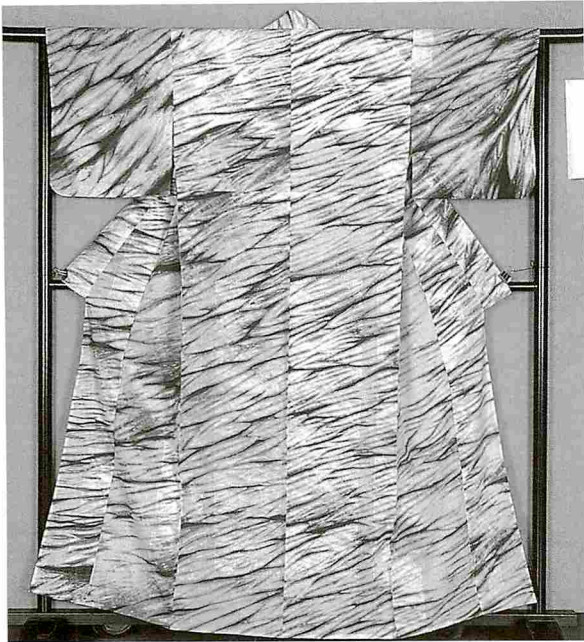
梅花柳絞浴衣地
畠山セツ／八郎湯町

◆柳絞のアレンジについて

残されている柳絞の中には、単純な柳文様のものの他に生地在所々に小さな巻き上げ絞りやホオズキ絞りを絞り、あいたところを柳絞りにした絞りもみられる。

柳絞りを地模様として、単純な巻き上げ絞りを散らすかわりに、少し手間を掛けて花などを絞ると少し豪華な感じの絞りになる。

柳絞りを地模様として、モチーフを散らす場合、モチーフの周りの襷の取り方、流れを意識して絞ることが必要である。また、先行して絞った花などのモチーフが柳絞りの襷の外に出ているように気をつけて絞ることに配慮しなければならない。

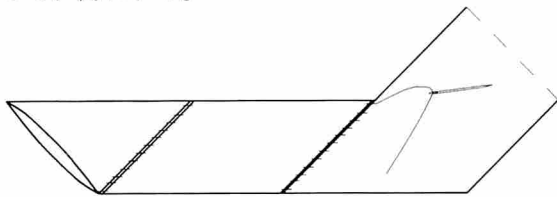


斜文絞浴衣 千葉厚子/天王町

◆斜文絞り（仮称）について

古くから染められた意匠なのか、後世のものかは解らないが、柳絞りによく似た絞りで、柳文様が布地に対して一定方向に斜交するものがある。絞りの名称がわからないので、ここでは仮に斜文絞りと呼んでいる。絞り方も本来の絞り方とは細部において異なるであろうが、当教室ではこの絞りを丸太状の芯を用いて以下のように絞って染めている。

1) まず、布地を図のように角度45°で斜めに巻くように畳み、接する耳同士を粗くかがり合わせて、筒にする。



2) この布の筒を一回り小さい径の丸太、塩ビ管等に被せ、端の部分を晒し布等で縛って固定する。次に、布の筒を一定方向に捻って芯の丸太、塩ビ管等に密着させながら、押し縮めて被せていく。糸は掛けない。全体を被せ終えたら、もう一度端から順次爪を立てて搔くように布を押し縮めていく。押し縮め終えたら終わり側も晒し布などできつく縛って固定する。芯が木製の丸太の場合は端に釘を打って染め作業中にゆるんだり抜けたりしないようにする。塩ビ管の場合はタイヤチューブ

を切ったもののような太いゴムひもでしっかりと端を縛ってずれないようにする。

3) 藍で染める

押し縮めた部分は、浴衣地で50cmていどになる。これを染めるにあたっては、これが浸って液があふれないだけの深さの藍の容器を準備する必要がある。

スチールのごみ缶を芯にして

染めの工程は柳絞りと同じであるが、芯があるため絞ることも脱水することもできないので、雑巾・タオル等で染めたものの水分を取ってできるだけ早く発色させる。発色するまではこまめに上下を返して、水分が一方に偏らないようにする。



この項のはじめに掲げた千葉の作例は最初の染めを殆ど乾いた状態で弱い藍で染め、その後発色を待って濡れた状態で強い藍を染め重ねていったものである。それに対し、次に掲げる嵯峨の作例は、強い藍を用いず、弱い藍だけで染め重ねたものである。強い藍を用いて、濡れた状態で染めると同様に白場は多いが、もようはもっと濃く濃く仕上がる。



斜文絞浴衣 嵯峨エイ子/秋田市

◆たたみ絞りについて

「横手では天明年間に畳ミ絞りが案出されていた」という記述が平鹿町史に見られる。簡易な方法であるとも書かれているので、県内に残る絞り染めの資料から考えて、畳ミ絞りは布を規則的に畳んで板締めをして染めるものと考えられる。板締め絞りは江戸時代の浮世絵版画に描かれた人物の衣装にも多く見られことから、当時は広く普通に行われていた絞りであると考えられる。「横手で案出された」というのは「横手でも出来るようになった」ということであろう。

私たちは、とりあえず「畳ミ絞り」を、“布を規則的に畳んで板で締めて染めるもの”＝“たたみ絞り”として様々な意匠の染めを試みてきた。

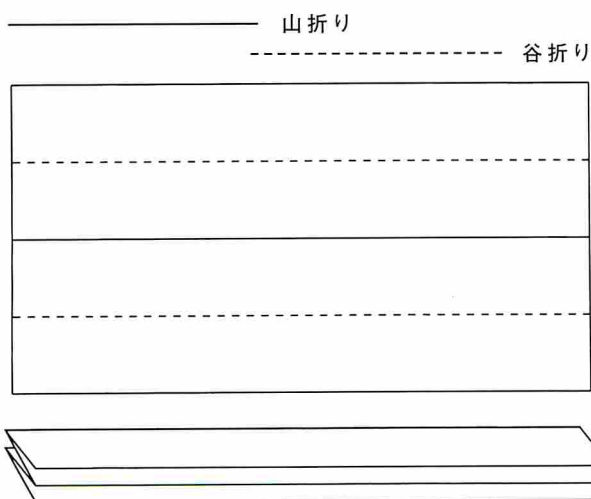
それらの手順は以下のようなものである。

- ①布幅を等分して屏風にたたむ→②たたんだ布を更に縦方向にたたむ→③たたんだ布を板で挟んで締める→④藍で染める→⑤発色させる→⑥仕上げる

次にそれぞれの過程をもう少し詳しく述べる。

- ①布幅を等分して屏風にたたみむ。

布巾は二つ、三つ、四つ、五つ、六つとたたむことが可能であるが、布巾のたたみ数が少ないほど模様は大柄になる。逆に布巾のたたみ数が多いほど小さい模様になる。



②の段階で、布巾のたたみ数が多いほどたたみ上げたものの高さが高くなり、③の段階の板締めや④の染めが大変になる。

また、染めに当たっては布巾のたたみ数が多い

ほど布の重なりが多くなり、重なりの内側の染め色が薄くなり模様を均一につくるのが難しくなる。均一に模様を作ろうとすると薄い浴衣地でも布巾六つたたみあたりが限度である。

＜背縫いの縫い代分の問題＞ 仕立てたとき背縫いで模様をきちんと合わせるためには、“布幅を等分にたたむ前に、背縫いの縫い代分を折っておく”ことが必用になる。

布幅を四つにたたむと、文様は鏡映を繰り返して布幅に四つ並ぶ。単位模様としては同じものが布幅に二つ並ぶ。これを浴衣に仕立てると、生地の子縁5mm～10mmが背縫いの縫い代としてとられる。和服は幅37cm～40cm程度の布地を用いて仕立てるため、後身頃を背中線ではぎ合わせるからである。文様の縁が1cm背縫いで隠れると、文様によっては、その連続感が著しく損なわれる。これを避けるためには、布幅を等分にたたむ前に背縫い分を1cm程度折っておけば良いと言うことは容易に思いつく。しかし、片縁を背縫い分折ることにより、たたんだものが部分的に最大で12.5%厚くなる。全体が均一な厚さのものを板締めするのではなく、たたみ方によっては1辺だけ12.5%も厚いものを板締めして染めたときに文様がどうなるか予測が立たなかった。しかし思案をしていたのは経験者で、今年から参加したメンバーが自分で考えてさっさとやってしまった。彼女は、片縁だけを背縫いの縫い代分折ってたたんで染めた。全く影響が無かったわけではないが、文様は背縫いできれいにつながった。案ずるよりは生むが易しで、行動力の勝利であった。

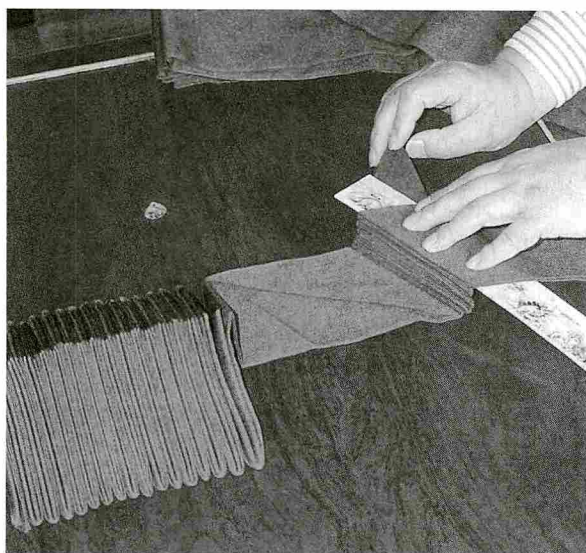
②細長く屏風にたたんだ布を、端から直角二等辺三角形や正三角形等を山折り谷折りを交互に繰り返して、形がきちんと重なるように規則的にたたむ。

浴衣一反分約13メートルをずれないようにきちんとたたむのは、やや根気のいる仕事である。布巾を四つにたたんだものを三角形にたたみ上げると、30cm程の高さになる。

細長くたたんだ布を更に縦方向にたたむとき、折りの内側の布がくずれて皺になると染めたときに模様に乱れが出る。折り目の内側に薄い定規の様なものをあててたたむと失敗がない。また、下

敷きのような薄いプラスチックや硬いボール紙で、たたんでいく三角形をこしらえて、それをあててたたんでいくときれいにたたむことができる。

布巾二つ折りの場合は問題ないが、四つ折り以上ではたたむに従い、たたんだ布がどんどん高くなり安定が悪くなりたたみにくくなる。誰かに押さえてもらうか、周りに厚い雑誌を積み重ねて同じ高さにしてたたんでいくという方法もあるが、次の方法が楽である。たたみ難くなってきたら、たたんだものを向こうによせ、上2～3段を手前に引き出して、その上にたたみ重ねていく。引き出した2～3段分とよせた部分の間はたたんだところが伸びているが、折り目がついているのでもとに戻ることができる。丁寧にやる場合は、スチームアイロンで押さえながらたたむとよい。またたたみ難くなってきたら、前と同じように2～3段を残して残りを最初によせた部分に加える。これを繰り返せば、そう苦勞せずにたたむことができる。



③たたんだものを板で挟んで締める。

布巾二つたたみのものは、たたみ上げたものの高さがないので、そのまま板締めが出来る。(以下の図解のようにして板締めをする)

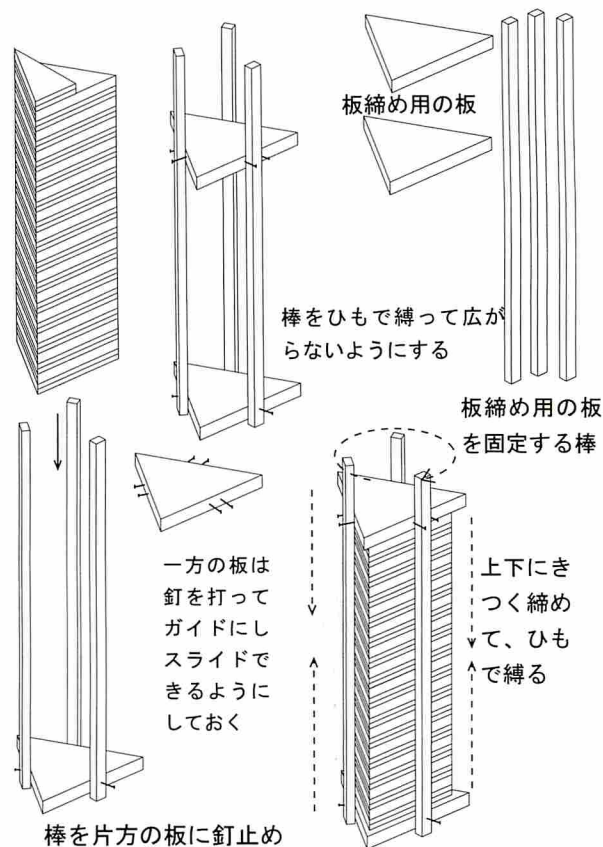
- ・たたんだ布と同じ形の木板（2枚）
- ・2cm程度の角材

（前記の木の板を挟んでひもを掛けて縛ることが出来る長さのもの4本）

- ・丈夫なひも

布巾四つたたみ以上の場合は、たたみ上げた

ものが30cm以上になるので安定が悪く、普通に板で挟んで締めると板がずれて外れてしまい、うまく締められない。以下の図解のように、締め板を別の棒で固定してから、布も板もずれないようにして紐を使って締める。



一反を小分けして、何回かに分けて染めると楽であるが、小分けしないで一気に染めないと。全部が同じ模様にならない。

同じようにたたんで、同じように染めると、上手くやると別々に見ただけでは一見同じに見える場合があるが、合わせて着物にしようとするときと妙に違いが際だってしまう。

板締めの強さで模様が変わる。染料の濃さ、染料を浸透させる時間、布地の性質等も大きく影響するので、定量的には示すことは出来ないが、傾向は以下のようなものである。

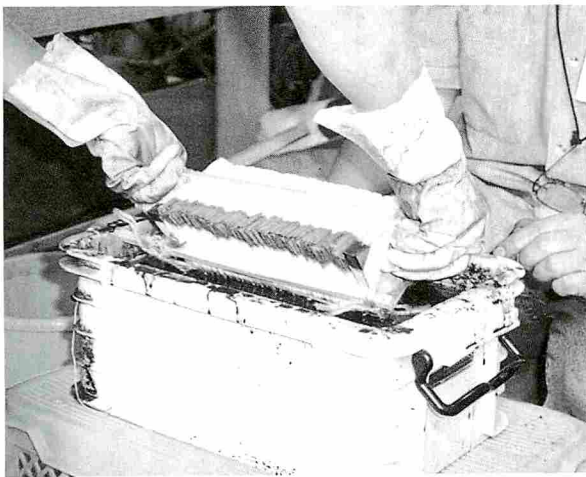
板締めに強くするほど、内部へ浸透する染液の量が少なく、藍そのものの浸透は浅い。板締めがゆるいほど、内部へ浸透する染液の量は多くなり、藍そのものの浸透は深くなる。微妙な表現で分かり難いかもしれないが、藍の染液が浸透しても浸透の先端の方は水分だけで藍の成分が届かないた

め、藍の染液が浸透した部分全部が染まることはないためである。

染液が深くまで浸透しないと、たたんだ折り目(辺の部分)だけが染まり、結果としては、線による幾何模様が出来る。染液が深くまで浸透すると、線が太ることになるが、頂点部分に近い辺は2方向(2辺)からの浸透による干渉で太ることができない。結果として染液を深くまで浸透させると、辺を対称軸とする花卉や鳥の羽模様になり、たたみ方にもよるが全体としては雪花文様の類になる。

④板締めをしたものを染める。

たたんで、積み上げた状態のものを横に倒した状態で染液に付けて染める。辺の部分に浸す状態、頂点の部分に浸す状態、一気に全体を浸す状態、様々なパターンがある。



漬ける時間が長いほど、染液は奥まで浸透する。しかし、藍の染料がしみこむ深さは、藍染液の濃度により限界がある。浸透している水分の動きが止まれば、後からついてきている藍の染料の浸透も止まる。それ以上漬けていると染液に触れている外側の辺のみが濃色になっていき、模様にもわができてしまう。

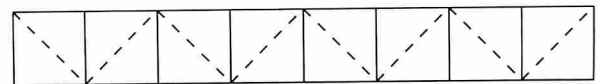
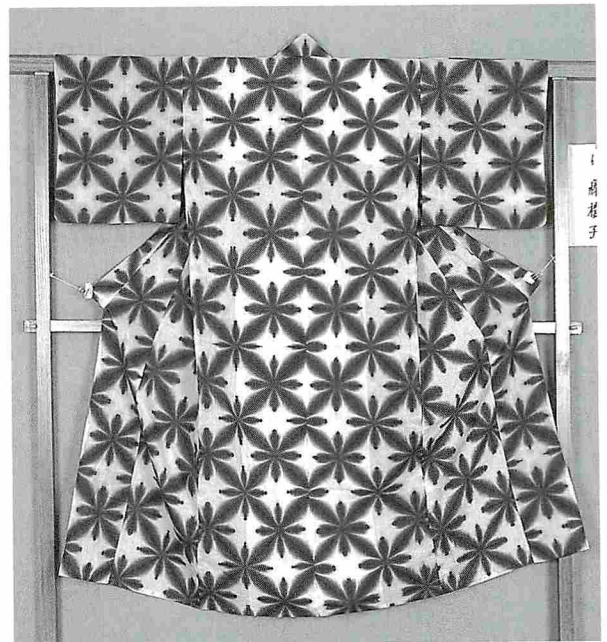
ここでたたみ絞りでの藍の染まり方の様子を少し詳しく述べておく。

たたみ絞りでは藍は布に浸透して行って染まる分と、直接液に触れている布が次々と染料を吸着して染まる分がある。藍の色素は浸透するにつれ多少なりとも薄くなる。布を重ねて染めると内側は色が多少薄くなる。また、藍の染料は水に乗って浸透して行くが、水より動きがとろい

ので、水に溶けているにもかかわらず水だけがどんどん先に行ってしまう。そのため水よりも藍は遅れてしみこんでいく。水が浸透して動いている限りは藍の色素は遅れながらもついていくが、水が布の端まで行き着いてしまい浸透による液の動きが止まると、藍の色素はそれより奥には入り込めなくなる。また、藍の染液に浸すのを途中で中止した場合も、水が浸透を止めれば藍の色素はそれ以上奥へは浸透できない。すなわち、先行して水が停滞しているところへは藍の色素は入って行けないということである。

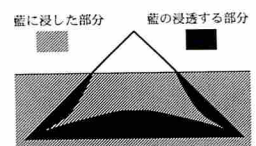
これらの藍の性質は布を均一に染めようとするときは大変不都合なものであるが、この性質を逆手にとって美しいたたみ絞りの模様ができている。たたみ絞りだけでなく、藍の絞り染めでは、この藍の性質をうまくコントロールして染めることが肝要である。

●作品例1 花格子文様浴衣 伊藤禮子/井川町

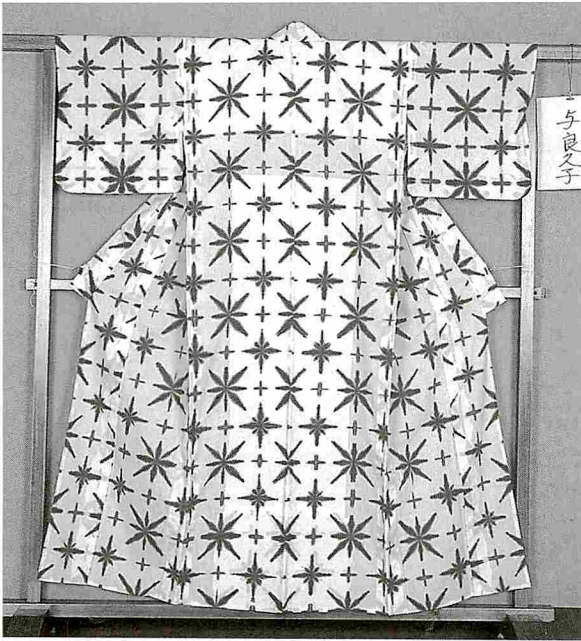


- ・直角二等辺三角形にたたむ
- ・布は乾いたまま染める

直角二等辺三角形の直角の頂点が残るように長辺を下にして染液に漬ける。一気に漬けた時と小刻みに時間間隔を置いて押し下げていった場合では模様の輪郭が変わる。

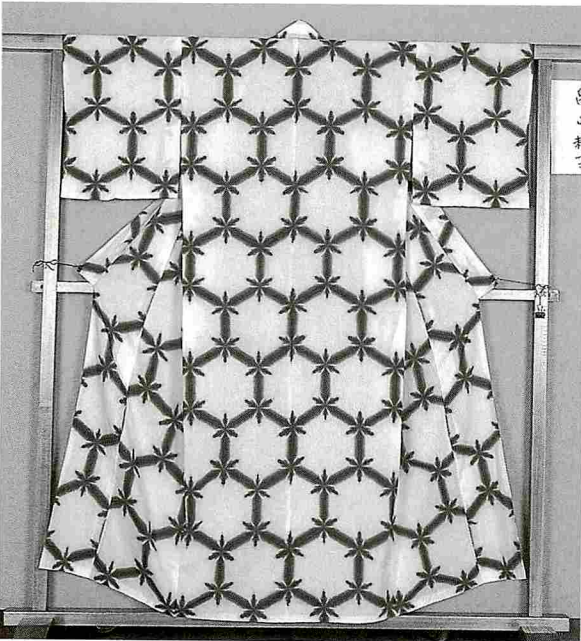


●作品例 2 格子文様浴衣 与良久子/井川町

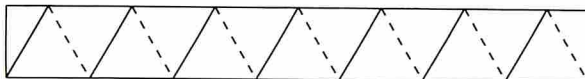


・作品例 1 と同じ方法、染液への漬け方が異なる。

●作品例 3 a 亀甲文様浴衣 畠山精子/秋田市

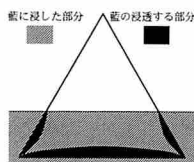


・正三角形にたたむ



a 布は乾いたまま染める

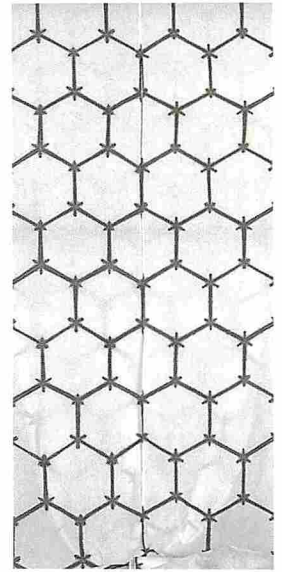
正三角形の一辺だけを浅く、あまり浸透させないように短時間染液に漬ける。亀甲の角に小さな花模様ができる。深く染液に漬ける程大きな花模様ができる。



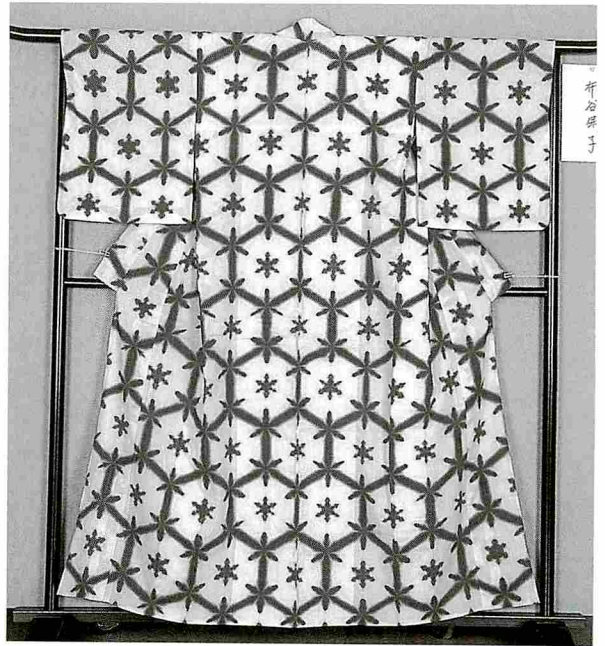
●作品例 3 b 亀甲文様浴衣地 藤田信子/能代市

b 布を濡らして染める

布はいったん水に漬け、きつく締めて水を切ってから、正三角形の一辺だけを浅く染液に漬ける。a に比べてあまり染液が浸透しないので、細い線の亀甲ができる。

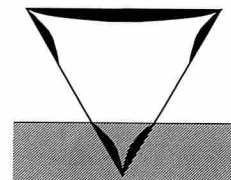
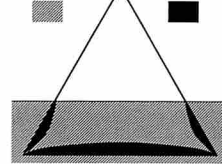


●作品例 4 雪花亀甲文様浴衣 布谷保子/大館市



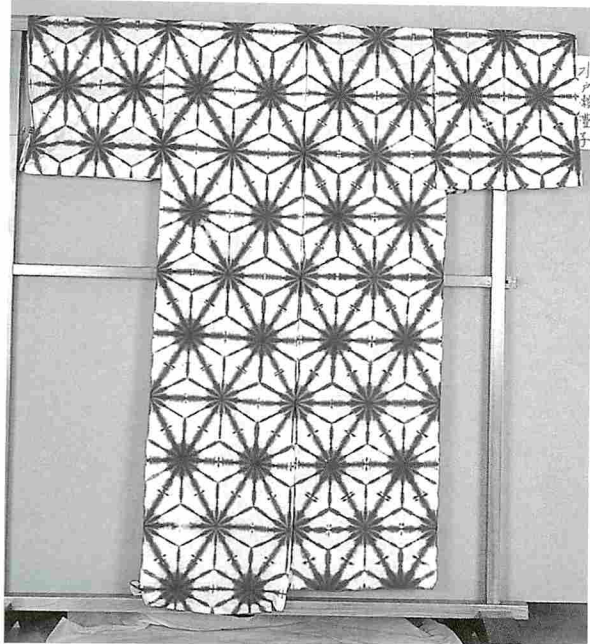
・正三角形にたたむ・布は乾いたまま染める

藍に浸した部分 藍の浸透する部分



正三角形の一つの頂点を、深さ3分の1～半分程度染液に漬ける（2～3秒程度短時間で）。染液からあげたら、水分が布に浸透しきるまで一寸待つ。水分の移動が止まったら、正三角の染液に漬けた反対側の辺を浅く染液に漬けて染める。

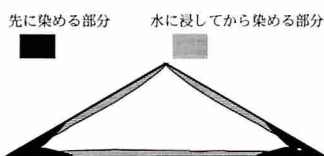
●作品例5 麻ノ葉文様浴衣地 水戸瀬禮子／天王町



30° 60° 90°、30° 30° 120° 三角形折り



二つの鋭角の頂点を長辺の3分の1程度の深さに染液に漬け、引き上げてから鈍角の頂点を水に浸



し、全体への水の浸透を待って全体を染液に漬けて染めると、花入りの麻ノ葉模様ができる。また、全体を水に浸してから軽く水を切ってから、全体を染液に浸すと線だけの麻ノ葉模様ができる。

※この染めに当たっての重要なノウハウは、できるだけ強い(濃い)藍を用いるということである。藍が弱いと、いくら時間をかけても奥まで藍が入らない。

⑤発色させる・・・発色前に広げる。

たたんだまま発色させると発色むらで文様が汚くなるので、染めたものはできるだけ早く広げて、広げた状態で発色させる。

まず、たたんだものを引き出してのばす。白い部分を摘まないようにして、染料がついた部分を摘んで次々と引き出していく。このとき藍はまだ発色定着しておらず、引きずると色がずれるので、絶対引きずったり擦ったりしないこと。そのためには、作業の手順を良く飲み込んだスタッフが5

～6人呼吸を合わせて作業することが必用である。

1反分13mを引き伸ばしたら、次に幅を広げて発色するまで水平に保持する。この作業を手早く行う。発色が終了してしまえば、下におろしてもよい。それほど難しくもなく手間もかからない染めであるが、一反分になると一人で染められないのが難点である。どうしても5～6人の補助が必用である。

重ね染めをするには、広げたものを一旦乾かし、たたみなおして染める。乾かさないと中に藍が入らない。たたんだまま発色させ、乾かすと、前述のように模様が汚くなる。

⑥仕上げ・・・他の藍染めと同様に仕上げる。



広げて発色を待つ

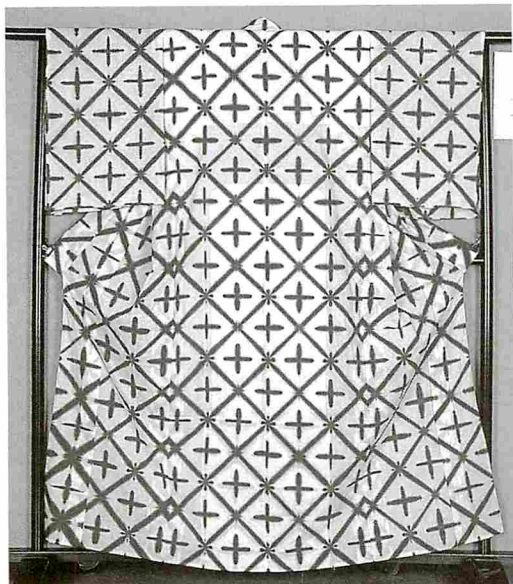
おわりに

このワークショップを開設して以来、秋田の絞り染めに興味を持って取り組んで下さる人の数は確実に増加している。また、ワークショップの作品展示を通してさらに多くの人々に、興味と関心を持っていただけたことは大きな成果であった。

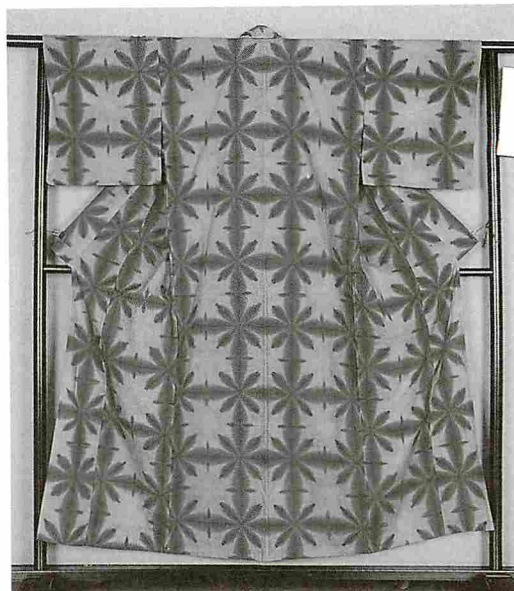
技術的にも多くのことができるようになってきた。しかし、絞りの仕事が見えるようになればなるほど、手が届かなくなっていく先輩たちの仕事もある。「見えるようになったのなら、早くここまで来い」と先輩たちは手招いているのだが、そこに至るには今しばらくの技の解明と修練のための猶予が必用であろう。

以下に本文中で紹介のなかった作品を紹介する。

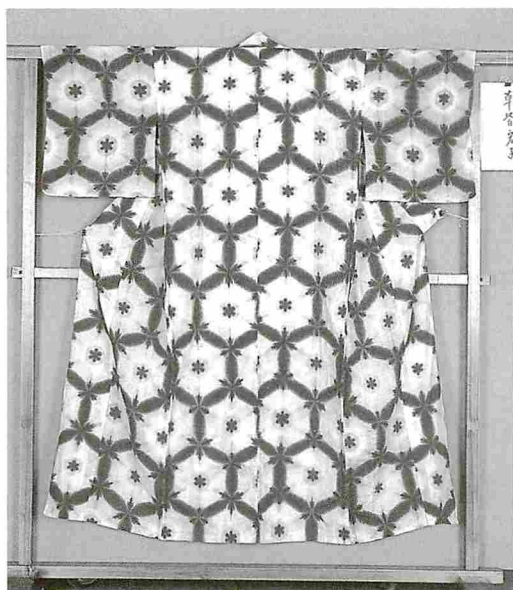
◇たたみ絞の作品例



左／たたみ絞
柵に十字文様
浴衣
水戸瀬禮子
天王町

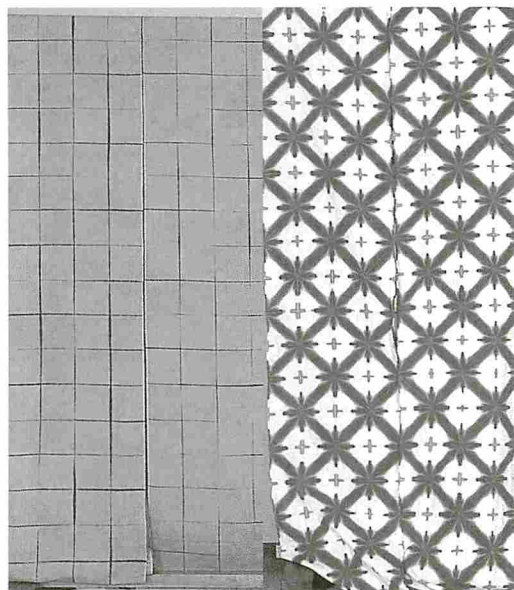


右／たたみ絞
花格子文様
浴衣
高堂史子
五城目町

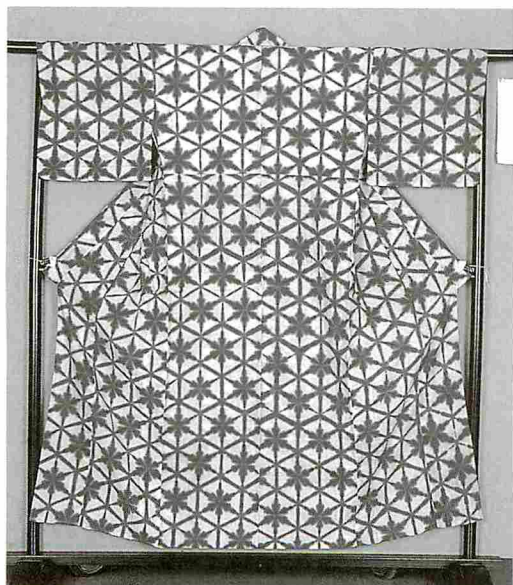


左／たたみ絞
亀甲に雪花文浴衣
草皆宏子
五城目町

中／たたみ絞
格子文様浴衣
澤井幸子
秋田市

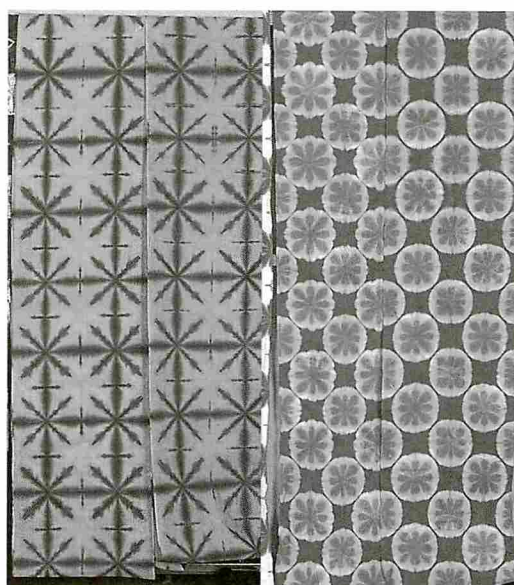


右／たたみ絞
十字に柵文様浴衣
阿部園子
本荘市



左／たたみ絞
亀甲に雪花文浴衣
奈良笑代
秋田市

中／たたみ絞
花格子文浴衣地
草皆宏子
五城目町



右／板締抜染
花文様浴衣地
阿部園子
本荘市

◇板締抜染の作品例／藍で染めた布を畳んで板で締め、たたみ絞の染めの要領で塩素系の漂白剤で脱色。

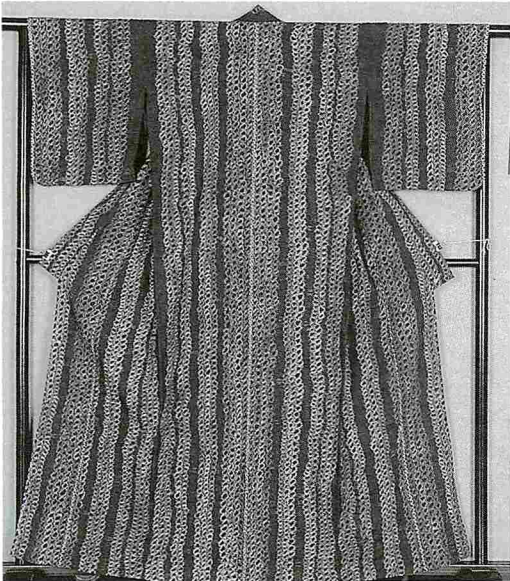


左／板締抜染
花文様浴衣
伊勢谷史枝
男鹿市

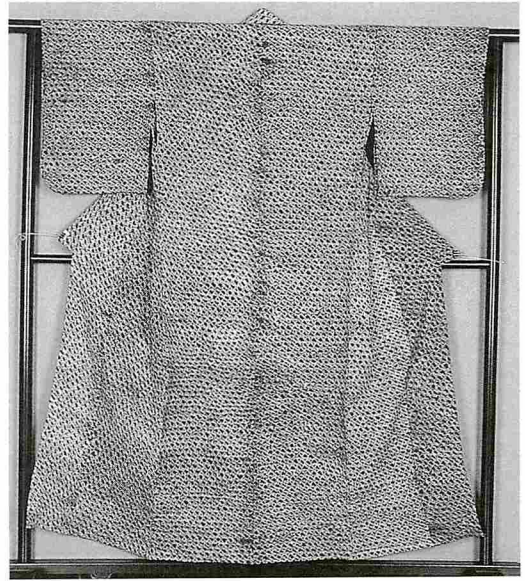


右／板締抜染
花文様浴衣
宮本康男
秋田市

◇三浦絞の作品例



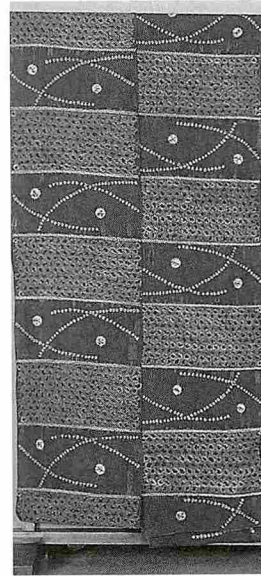
左／三浦絞
縞文様浴衣
中野竹子
秋田市



右
横三浦絞浴衣
横山和子
秋田市



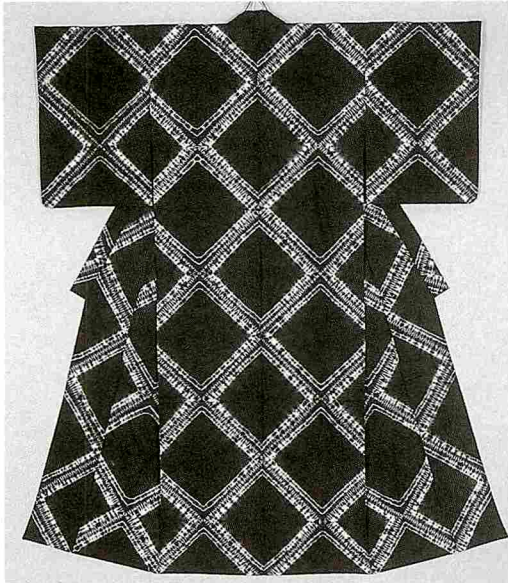
左／三浦絞
ふくら雀文様
浴衣
宮本康男
秋田市



右／三浦絞
段替わり
浴衣地
大友ひろみ
秋田市

三浦絞は濃い藍を染めた中に中間調の藍の色として現れるので、藍の色の豊かさを表現するため、様々に応用されます。幅の狭い段替わりは、模様を横に通して柄合わせをすると、鬨斗目風の意匠になる。

◆鹿角風の二枚絞りの作品例 この絞りの技術については本館研究報告第22号にその概略を示してある。



左
大柵絞浴衣
宮本康男
秋田市



右
大柵絞浴衣
宮本康男
秋田市

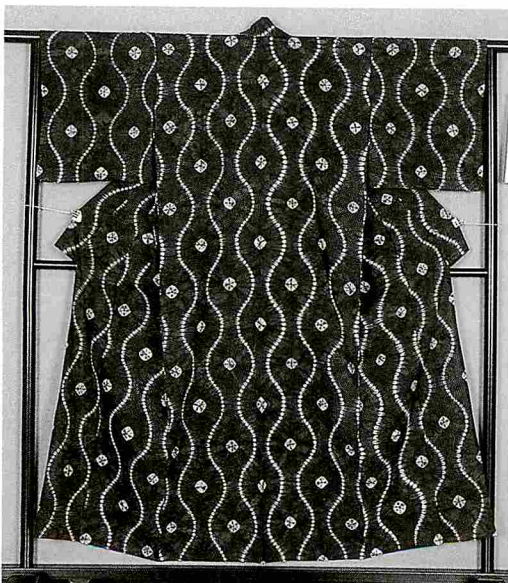


左
小柵絞浴衣
佐藤久美子
秋田市

中
小柵絞浴衣地
和賀芳子
秋田市

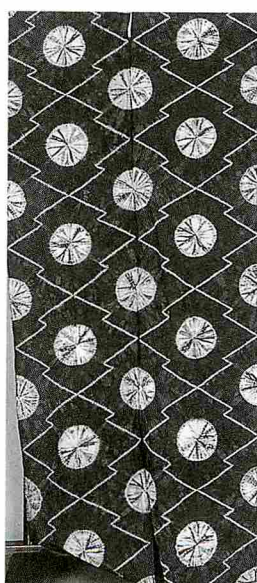


右
立涌絞浴衣地
加藤豊子
秋田市



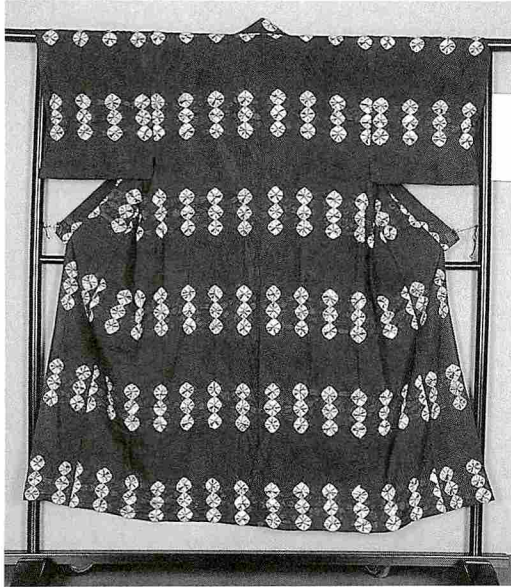
左
立涌絞浴衣
高堂史子
五城目町

右
松皮菱浴衣地
草皆宏子
五城目町



松皮菱の紋
松皮菱の紋で布巾を二つにたんで二枚で絞る方法は大柵絞と同じである。
デザインとしては、大柵の直線の辺を、稲妻形の線に代えると松皮菱になる。

◇巻上絞の作品例

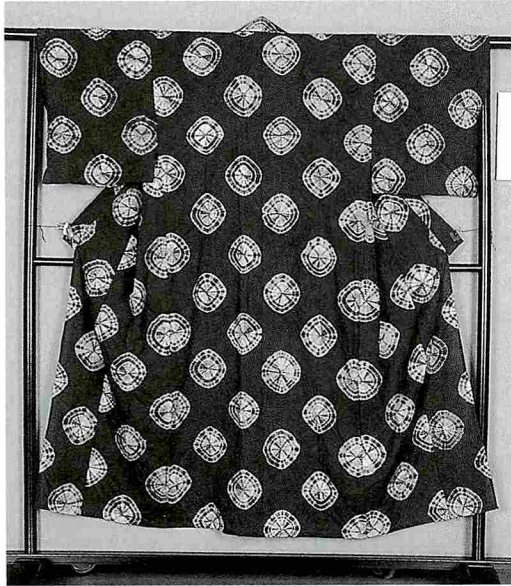


左／巻上絞
団子文熨斗目浴衣
石井吉兵衛
秋田市

右／縫締巻上絞
大霰文浴衣地
布谷保子
大館市

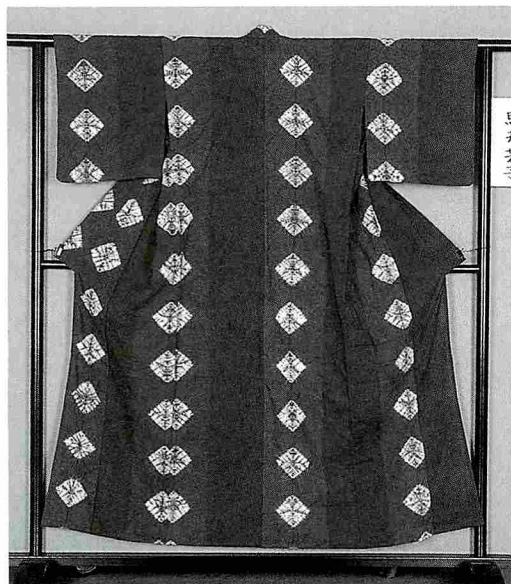
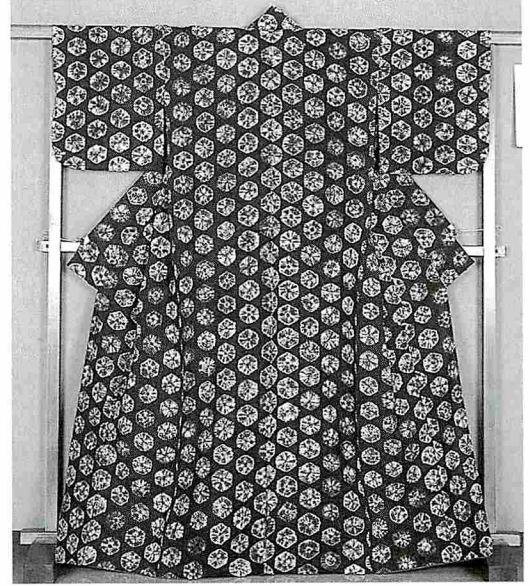


縫締巻上絞
巻上絞で正確な円や、
その他の任意の形を作る
には、形の輪郭を平縫い
して引き締めてから巻上
絞を行う。
・小円を縫い締めて巻き
上げたもの／布谷保子
・六角を縫い締めて巻き
上げたもの／伊藤まりこ
・菱と卵形のモチーフを
縫い締めて巻き上げたも
の／阿部園子



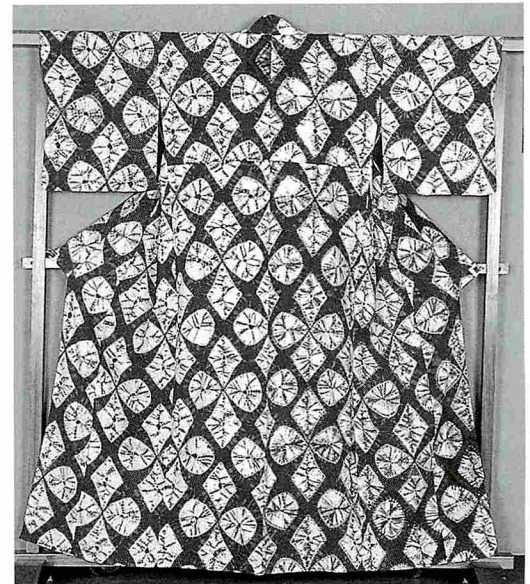
左／巻上絞
ほおずき絞浴衣
石井吉兵衛
秋田市

右／縫締巻上絞
亀甲巻上絞浴衣
伊藤まり子
秋田市



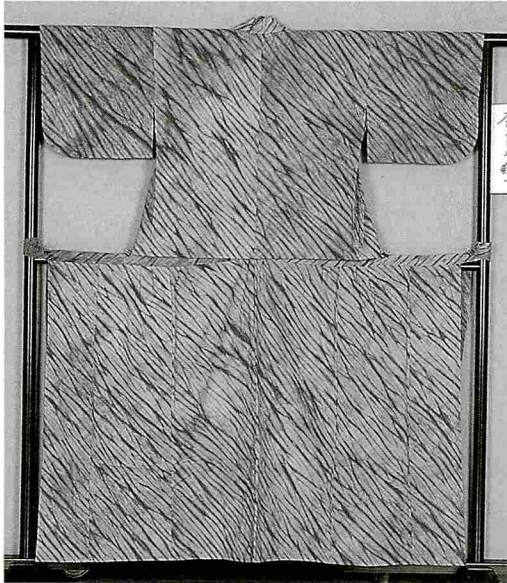
左／縫締巻上絞
柘文様縞浴衣
照井芳子
秋田市

右／縫締巻上絞
花文巻上絞浴衣
阿部園子
本荘市



照井芳子

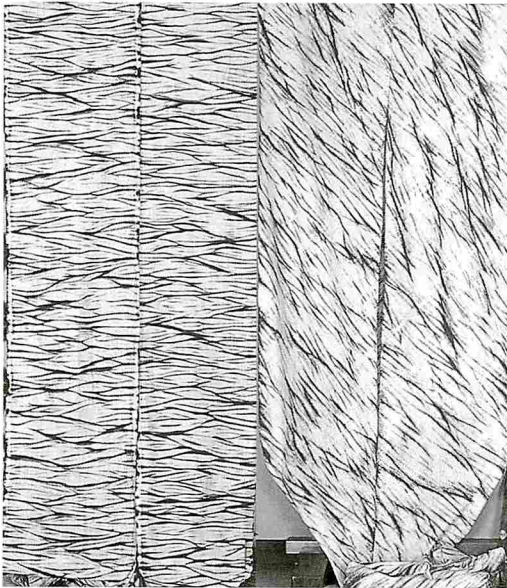
◇斜文紋他様々な技法の作品例



左
斜文紋浴衣
奈良千鶴子
秋田市



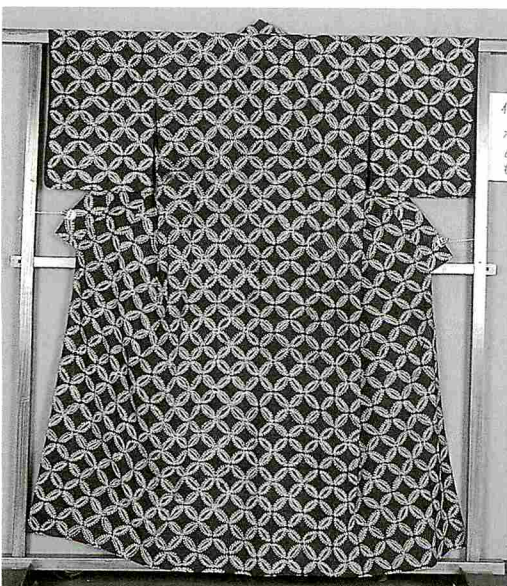
右／おっこち紋
桜花文様浴衣
齊藤せい
秋田市



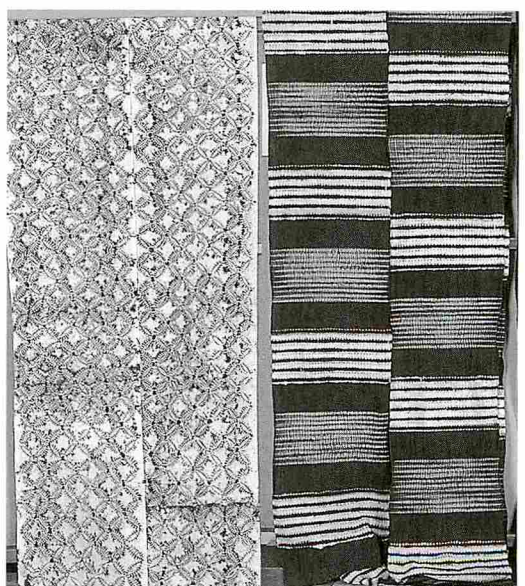
左
斜文紋浴衣地
小川敬子
仁賀保町



中
斜文紋浴衣地
加藤豊子
秋田市
右／杻目紋
杉綾文様浴衣
池端アヤ子
西仙北町



左／合わせ縫紋
七宝繫文浴衣
佐々木とも
秋田市



中／白陰紋
七宝繫文浴衣地
佐々木とも
秋田市
右／縫締紋
段替わり浴衣地
鎌田和子
天王町